

ラオスのこども通信 8号

『ラオスの子供に絵本を送る会通信』を改称しました (1996年9月発行)



イラストは、専門家派遣セミナーの講師、やべみつのりさん

バイラーンの文化、ラオスの心

やしの葉に釈迦の教えや民間伝承を書き記したバイラーン(貝葉)。現在、ラオスでは復興事業が進められています。そのキーパーソンは当会でもおなじみのCCC(子ども文化センター)館長ダラーさん。今年5月、バイラーン復興の功績で日本経済新聞社より日経アジア賞を受賞し来日した際、ダラーさんを囲んでお話をうかがいました。

バイラーンは、やしの葉の一種で、これに鉄筆で文字を描き、油を混ぜた墨を塗ったもの。扇のように束ねられ、保存状態がよければ千年はもつといわれています。仏教とともにスリランカから東南アジアに伝わり、ビルマ、タイ、カンボジア、インドネシアなどにも広がりました。

ラオスのバイラーンは、パーリ語で書かれた仏教の教典が約8割、ラオスの文字で書かれた17~18世紀ご

ろのラオスの民話などが約2割です。法律、占い、歴史、漢方薬の処方箋なども書かれています。

ラオスの文字は仏教が伝わる百年くらい前からすでにあつたといわれ、それは石碑からも確認されています。

フランスの植民地となる以前は、唯一バイラーンが知識を与えてくれるものであり、バイラーンを学ぶことがラオス人の教養だったのです。

バイラーンはありがたいものとさ

れ、低いところに置くことは許されず、運ぶときには肩に担ぎました。この習慣は600~700年間守られてきました。触れることが許されるのはお坊さんだけ。ですから読めるのは出家して学んだ人(人によって長短はあるが男性は一度は出家する)で、どの村にもたいてい朗読の上手な男性がいて、村人に聞かせました。つまり一般の人々にとって知識を得る行いとは、“読む”ことではなく、

パイラートを“聞く”ことでした。

子どもが生まれたり、葬式など人々が集まる時には、その場や季節に合わせた話を選んで読まれました。パイラートを読んで聞かせると、みんなはそれを守りました。暮らしのきまりとして、心のきまりとして。私自身、母からたくさん話を聞かされたが、8割くらいはパイラートの教えでしょう。

お寺になぜたくさんパイラートがあるのでしょうか。お寺に文字を納めることは仏像に相当する価値があると私は教えられました。ラオスには、法要のときにはパイラートを奉納するという習慣があったのです。

ラオスの文化、歴史を知ることができる大切なものなのに、すたれてしまいました。これまでのたび重なる戦争で文化遺産が焼かれ、タイに文学作品が持ち去られ、作家が連れ去られたりしたためです。

フランスは近代的な教育を導入し、僧も古い勉強の仕方を疎んじるようになり、ここ40年はパイラートは忘れられていました。書かれている文字が非常に難しいことも、人々が遠ざかった理由のひとつでしょう。

現在、タイのラジオが入らない村、私は純粋な村と言います(笑)、ここではみんなパイラートを耳をすまし

て聞いてくれます。それは素晴らしい光景です。でも自家発電で貸ビデオを見ている村はだめです。今は貸ビデオ屋が多く、暴力ものばかり。

ある村では長老が子どもたちに聞かせていました。子どもたちは、イメージをふくらませ、映像を見ているように聞いていました。もしその村にビデオがあつたら、みんなそっちにいつてしまうでしょう。だから私はビデオが入らないようにお釈迦様にお祈りしたいくらいです(笑)。

88年、石井米雄先生とトヨタ財団の助成を得て、復興プロジェクトがスタートしました。

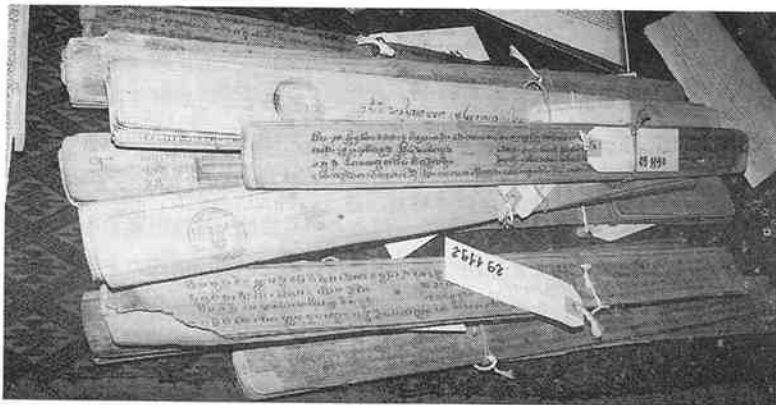
まず、村の人々とともにパイラートを掘り起こし、きれいにし、分類、保管をすることから始めました。マイクロフィルムにもとっています。さらに、村に残っている読める老人に、他の人が読めるように指導を頼みました。また、読みやすいようにラオス文字に替える活動も進めています。例えば、サンシンサイ(ラオスの英雄伝。シンサイともいう)は、パイラートに1万行もの長い詩で書かれています。これを私の父が1932年に普通のことばに翻訳しました。その後、さらにことばをかみくだいで出版し直しました(会で支援)。



僧侶の中学、高校にパイラートを読む授業を設けました。いずれ一般の中学校以上にも広げたいですね。

パイラート復興プロジェクトは大きな成果を生みました。それは、村の人たちが自分たちの文化はとても素晴らしいのだと気づいたことです。今までは、メコン川の対岸(タイのこと)を見て、近代的な発展とはああいものどか、あるいはテレビを見て、ああい服を着ることが近代的なんだと思っていたのです。このプロジェクトを通じて、外国人もラオスから学びたいものがたくさんあるということを(現在、フランス人が仏語と英語に翻訳している)、知らせることによって、自分たちの文化に誇りと愛着をもてるようになったことは大きな成果です。

私たちは、おえらいさんが来たというやり方でなく、村の人寝食をともにして、信頼を得て仕事を進めました。50歳以上の方はパイラートを知っていて喜んでくれます。20代の方は知りません。今ならとりもどせる。そう思ってやっています。文化とは民衆にあるべきもので、学者や政府にあるべきではないと、私は思います。



日本での研修を終えて

パダペット(ヴィエンチャン・スタッフ)

現地スタッフのパダペットに、今年春、日本での研修を実施。図書館、学校、家庭文庫を見学しました。ご協力いただいたみなさんには、大変お世話になりました。以下、パダペットの研修の感想を報告します。

* *

日本にはたくさんの本があり、たくさん知識を吸収することが可能だ。大学に行かなくても自分で技術なども勉強できる。日本の図書館は、

子ども用の本だけでも、ラオスの国立図書館より数が多い。

いちばん重要なことは、すべて日本語で書かれているということ。これで日本人はみんなが読むことができるのだから。

文庫活動に興味深かったのは、お母さんたちが、自分で運営費を作りだしていること。しかし今のラオスでそれをするのは難しい。人口も少なく(400万人)、金持ちは理解がな

いから。一般には、小学校さえ出ればいいと思われ、学問に興味のない人が多い。このような環境なので、すぐに同じようにはできないけれど、ラオスの国立図書館の人々や高校生たちと協力して、できることから始めたいと思う。

小学校の図書館を見て、とにかく管理する人が重要なのがよくわかった。いろいろな図書館で、さまざまな貸出し方法を見せてもらった。ラオスに帰ったら、会で整備した学校図書室の先生たちを集めて、小さなセミナーを開き、日本での研修で得たことを伝えたいと思う。

留学生が語るラオス

ケオラさん profile——89年にヴィエンチャン高校を卒業後、日本に留学。現在、豊橋技術科学大学で学んでいます。

ラオスの人にラオスを語ってもらいたい。そんな趣旨から、今回は、留学生に原稿を寄せていただきました。

ラオスの教育は、次のような問題を抱えていると私は思っている。

学校が足りない

毎日、数時間かけて登下校する子どもたちも多い。山岳地帯に住んでいた友だちによると、彼は1週間分の食料をもって、幾つもの山を越え、泊り込みで学校に通っていた。私が通った中学校は、小学校と一緒の建物を使っていたため、授業は午前中だけだった。高校を卒業して進学を希望するものは、首都へ行くか、留学するしかない。

●教科書、勉強道具がない

ラオスでは、学生の殆どが教科書を持っていない。したがって、授業時間のほとんどを、自分のノートに

授業内容を書き移すことに費やす。理科の授業で、教科書以外に使用されるものはまったくない。

●子どもは家族の大切な労働力

ラオス人の80%以上は農業で生計をたてている。したがって子どもは大切な労働力である。農村部では小学校を卒業すると同時に働く子どもが多い。貧しさのため、子どもたちの稼ぎも家族の重要な収入源である。

●教育の大切さがわからない

親にとって、教育によって得られるものははっきりと見えない。何年も時間をかけて勉強するより、商売をして儲けた方が、よりいい生活を確実に手に入れられる方法だと思っている親も多い。

●資格のある教師が少ない

教師不足を解消するため、ラオスでは多くの無資格教師が教えている。読み書きと算数さえできれば小学校

の先生にはなれる。高卒で高校教師になり、大卒で大学の先生になることも、決して珍しくない。

●教育関係に人材が集まらない

ラオスでは、先生の給料は低い。給料だけで自分の家族を養っていくことは不可能に近い。したがって、多くの先生は副業を持っていて、学生に教えることに専念できない。半年以上給料を貰っていないというのも、決して珍しいことではない。学校でひたすら先生が来るのを待つ小学校時代は、今も鮮明に覚えている。自国の文化に興味を持たない人々

ラオスには文化活動がほとんどないため、人々は外国から入ってきたものに走る。ラオスで発行されている新聞や雑誌は少なく、小説のような教科書以外の書物は殆どない。国立図書館を友だちと訪れてみたとき、自分たちの読みたい本が何一つなか

ったことは、今もよく覚えている。テレビの影響で、ラオスの子どもたちはタイ語をしゃべり、タイの歌を聞き、タイの本を読む。ラオス語とタイ語が見ている言葉だけに、これはとても危険なことだと思う。

ランサン王国(ラオスの前身)が、ファーム王によって設立されたのは600年以上も前のことだが、18世紀の後半から約200年もの間、ラオスは外国の植民地となっていた。つまり、ラオスは約200年間、侵略者に破壊と略奪をされ続けたことになる。「ラオスについて研究したいのなら、フランスやタイの国立図書館へ行った方がいい」と言われるくらいである。1975年にやっと完全な独立を手に入れたが、植民地時代と独立戦争の傷をなおすには、まだ長い時間が必要だ。

まず、インフラストラクチャーはほとんど未整備の状態にある。電力、水道、道路、通信などの整備は全然、進んでいない。大きな町以外のところでは、電気も水道も供給はない。メコン川沿いの船便や国内の航空便はあるが、それも主要都市間だけである。電話が使えるのも、ごく一部のところに限られている。

第2に、植民地時代でラオスは、何から何までを外国に頼っていた。ラオスは単なる税金や天然資源を取り立てる場所であったため、これらによって産業はほとんどなかった。これを象徴するかのように、ラオスにあった、たった1本の鉄道はラオスからものを運び出すためにフランスが作ったものであった。今でも、日常生活用品から電気製品、機械類のほとんどは、もちろんまだ輸入に頼

っている。水力発電と木材が主な輸出品であるが、両方とも自然破壊につながる。

第3に、長い植民地時代、ラオスの文化は外国の支配者に弾圧され続けたため、文化活動は盛んでなく、教育などの整備は全くといっていいほどなかった。学校ではラオス語は外国語のように教えられていた。ラオスの文字を廃止し、ローマ字使用するというような動きもあったが、自分の国の文化に誇りを持つ人たちの反発で、その動きを阻止できたことは不幸中の幸いであった。

いちばん大切なのは、学校教育の整備だと私は思う。ラオスは世界的に見ても、人口の少ない国である。本州とほぼ同じ大きさのところに、400万人ぐらいしか住んでいない。日本や欧米のような発展は、不可能である。また、それをまねする必要もない。自分たちで、自分たちにあった道を捜しだすためには、もっと高レベルの教育社会となることが必要である。しかし、前述のような状態である。文学作品を読みたくても読めるものが限られている。いわば、子どもたちの感性を育てるものがないということだ。多くの場合、外国語で書かれた参考書や本、雑誌、小説を読まなければならない。これはまた、人々、とくに子どもたちを、自らの国を軽視する傾向に拍車をかける。

戦争が終わって、今年で21年目になるが、ラオスはまだ世界でもっとも貧しい国の一つに変わりはない。しかし、最近少しずつではあるが、発展する方向に向かっている。

外国の援助は、もちろん発展する過程の中で大きな役割を果たす。しかし、もう少し違った方法はないかと思う。ラオスは以前から伝統的に外国からの援助を受ける国だが、汚職など、援助を受け方にたくさんの問題がある。登下校の途中、放置されてすっかり錆びついた外国からもらったトラックなどを見たときや、援助プロジェクトに加わった官僚たちがプロジェクト完了を前に、1軒も2軒も家を建ててしまうということを知ったときには、一ラオス人として、恥ずかしいという言葉だけでは言い表せないものがある。

また、お金だけを出してそれで終わりのような援助が、現地にとって役立つとは到底思えない。したがって、子どもたちの能力・感性を育てるような「ラオスの子供に絵本を送る会」の皆さんの活動には、一現地の人として、心から感謝している。将来、日本の参考書や、文学作品をラオス語に翻訳することや教育分野に活動を広められればと、期待している。

最後に、援助する側である先進国の人々に言いたいことがある。最近の発展途上国や貧しい国の急激な発展によって、地球環境への影響を懸念する先進国の人々の声が高まっている。しかし、少数派である先進国の天然資源の使用量が、多数派である私たちの使用量を大きく上回っていることはまぎれもない事実である。食べ物さえ満足にない人たちに、そんなことについて考える余裕はないはず。もう少し、相手の立場に立って考えて欲しいものだ。

専門家派遣セミナー、ラオスで開催

96年3月、昨年に続いて、ラオスに造形、絵本の専門家を派遣して、子どもと先生を対象にワークショップを行いました。

ひと言で言って意外の連続。エキサイティングな毎日でした。

尾崎曜子

子供たちの元気、好奇心は想像以上で、それだけに十分な教材がないことが何よりも残念でなりませんでした。描きたくて描きたくて、大きい子の教室にもぐり込んで描いている子の後から手だけ出して色を塗らせてもらっている子がいて、思わず1枚あたらしい紙を与えると、立ったまま夢中になって絵を描き始めた姿が、忘れられません。

初めての水彩画指導は、筆や水や絵の具の出し方・混ぜ方の説明もろくにできないまま始まったので、大勢の子供の目くばり初めのうちは大わらわでした。実際の物を見て写生する習慣があまりないと聞いていたので、身近な花と果物をテーマにしました。サヤブリでは、生きたニワトリを校長先生の家から借りてきて描かせたところ、とても生き生きした作品ができました。

一方、一番困ったのは先生とのコミュニケーションの行きがちがい・思いちがいでした。学校によっては、先生方の意識が必ずしも高くなく、私たちの指導に協力的でない感じを受けたところすらあります。

サヤブリでは先生方への指導という日を設けましたが、指導というより、先生方自身が水彩画初体験だったり、とまどいながら熱中してい

ました。一緒に描いた子供たちの方が生き生きとした絵が描けたくらいで、先生方に体験してもらって良かったと思う気持ちと、この実力で教師として子供たちの上に立たなければならぬ立場に同情もわいて複雑な気持ちでした。

学校の教室に貼られている絵が皆同じなのはなぜですか、と質問したところ、上から教育委員会の監査が来る時はきっちり同じ絵が並んでいなければ教師の指導が行き届いていると見做されず、一人ひとり別の絵が描かれていると、教師は何も指導していないと見做されると答えたのには、ほんとうに驚きました。

いっぱい笑顔と歓迎はとてうれしく、ほんとうに来て良かったと心から思う反面、この1回の体験が、この先どれくらい先生方によって生かされることが可能なのか、教材不足を寄付だけに頼らなければならない現実、将来への期待が持てない等、不安を感じました。

子供たちの絵は正直言って、良く描けているとはいっても年齢をみると12~13才の子供の絵が日本の小1、小2くらいのレベルと言えなくもありません。しかし絵画というのは、算数や国語のように一定レベルをクリアするのが目的ではなく、描いている過程、描くことそのものが、自分を解放したり、創作のよこびで自分を高めることが、より大

切なのだと思うのです。ですから、何とかして子供たちにもっともっとチャンスを与えてやりたいと痛切に感じました。

また、唯一の画材である色鉛筆の描き方を指導してほしいとのことで、私が風景画を色鉛筆でデモンストレーションしたのですが、色鉛筆というのは他の画材以上にコツがいるものでもあり、想像以上に紙と鉛筆の質の悪さに閉口し、理想的な手本を示すことができませんでした。物余りの国から、こんなにも物不足の国へ来てみて、何がほんとうに必要な物なのか続き、深く考えさせられました。今後、このプロジェクトを続けていくに当たって望まれるのは、現地での教材の調達の見通しがまだない現在、やはり差し当たって、より多くの教材とスタッフを送れる費用が必要とされることだと痛感しました。

朝は、日の出前に起き出して（この時期、ラオスの日の出は遅いので、すね、7時頃？）ホテルからメコン川の方へ歩いて、かごいっぱい花を拾ったり摘んだりして集めるのが、毎日の日課でした。道いっばいにこぼれているチャンパの花、ブーゲンビリアやランタナ、ハイビスカス、それに手の届くところに付いているジャックフルーツの実などなど、花好きの私には心はずむ仕事です。

そして、教室にあふれる子供たち



の前にこの花と市場で買った果物を並べて、絵の授業が始まります。

好奇心いっぱいの顔・顔・顔……。まず、私のTシャツの背にマジックで描いたラオス文字の私の名前を見せて、アチャーン・ヨーコ！と覚えてもらいます。

初めての水彩画は、いつも定員オーバーの生徒と、さらに窓からのぞく、もっとたくさんの物見高いギャラリーたちにもみくちゃにされて、汗だくでした。人数を数えて机に着かせることに始まって、絵の具・紙・筆・筆洗を配って、果物・花をひとりずつ与えて、さあよく見て描きましょう、と声をかけます。

浅沼さんがつきっきりで通訳して下さって、とても助かりました。私も口移しのラオス語で「うまいうまい(ケンケン)」とか「もっと大きく(ニヤーイ)」とか「水つけすぎ」「乾くまで待ってー」とか、あっち向いたりこっち向いたりして叫び続けていましたが、はたして通じていたのでしょうか。やっと出来上がった絵は、名前と年齢を書き入れさせて、全部黒板に貼り出して、ひとりずつ名前を読んで拍手してあげると、どの子もうれしそうなこと。

ホテルへ戻って後始末と翌日の仕込み、次の日はまた文庫のバスやトゥクトゥクに画材を積み込んで学

校へ、と絵の具をしょった旅芸人という毎日でした。メコンに落ちる真っ赤なトマトのような夕日を見て飲むラオ・ビールは最高でした。

2月末にピエンチャン入りした頃には、まだ枯れ木のように見えた菩提樹が、3週間後には瑞々しい若葉をたっぴり風にそよがせて、南の国も春なのですね。これからが本格的な花の季節という時に帰らなければならぬのが、ちょっぴり心残りでした。また再び訪れることを祈って……。ほんとうに楽しい旅でした。

造形を通じてアメリカやエジプトの子供達と交流をしています。東南アジアの子供達とは初めてでした。

浅葉和子

●ラオスの子供達はとても素直で礼儀正しい。長い間の社会主義政策のせいか個人の感情をストレイトに表現するという習慣が無いような気がしました。絵画も写し絵がほとんどで自分の心を表現するという感覚があまり理解できず戸惑っている様子でした。物が少なく経済も豊かではありませんが子供達は優しく素直で明るい表情をしていました。

学校では先生がかなり権力をもっている様子で命令調の態度が多く子供達は先生のいうことを良く聞いて行動していました。教室での子供達は目が会うとにっこり微笑む以外言葉が無くとてもおとなしく、個人的に指導すると合掌して頭を深く下げるので初めは恐縮してしまいました。子供達の遊びはゴム遊び、地面に絵をかいてのゲームなど私の子供の頃を思い出しました。

サヤプリの郊外に出掛けたときたくさん電気や水道のない家庭の暮

らしぶりを見ました。ランプの光の明るさ、ほのぼののした暖かさ、自分の手で作った野菜、捕らえた魚で食べる一家団欒の長い夜、日本では忘れられたしまった自然と共に生きる安らぎを感じました。画材もなく、物が少なく不便なことは確かにありますが、なによりも豊かな自然がいっぱいあるラオス、絵の具がなくても草木染め、竹細工、木工、織物、粘土など造形の材料は探せば身じかにたくさんありますからこれからはラオス独自の造形の方向を探っていくと良いと思います。

●エジプトの子供達の絵の中にはピラミッドをはじめ歴史的な遺跡の絵がたくさん出てきます。エジプトでは古代から王様の生活を壁画にしたり像を建てたり、アートと生活が密着していた上、古代遺跡の国としてそれを国の誇りにして国家が成り立っているの、子供達の絵の中にもそういった物が日常に出てきます。またアラブは常に宗教による戦争の危機感を持っているせいか戦争の絵がたくさん出てきます。子供達の表情は貧しくとも前向きで明るく、目が輝いています。子供達の遊びは自転車のタイヤ転がし、サッカーなど、そしてたくさんの子供達が物売りをしたり、織物をしたり仕事をしています。

●ネイティブアメリカンは、アメリカ合衆国の広々とした大地を追われ狭いザベーション(居留地)の中で先住民族としての強い誇りを今だ生活習慣の中に強く主張しながら生きています。そんな中で子供達の絵の中には部族の伝統的なシンボル、行事など部族としての大切な事柄、山や動物、建物など大きな風景が良

く描かれます。

子供達の遊びは川で泳いだり、馬に乗ったり、自然と共に過ごすことが多いのですが、西洋文明もものすごいスピードで入り込み、ニンジャタートルなどのコンピューターゲームも浸透しています。昔はお年寄りから話を聞いたり、ビーズ細工や織物を習ったり、伝統的な工芸を

生活の中で自然に学んで行きましたが、テレビや、ファミコンなどの影響で無くなりつつある状態です。

●日本の子供達は今どっぴりと豊かな文明に漬かって、飽和気味です。ものがあることが当たり前なのですべてのものに感謝の気持ちを忘れてしまっています。また激しい受験戦争の中で朝から晩まで勉強、点数主義の教育の弊害がいろいろの形で出てきました。子供達の絵は家庭の中での生活画やファミコンのキャラクターなどが自然に描かれます。宇宙や未来都市などSF的な絵、迷路などもたくさんでできます。

以上4つの国の比較を通してその国の状況が子供達の絵の中にそのまま表現されていることが改めて感じられます。ラオスもこれから近代文明をどの様な形で取り入れていくか、これからが本当のスタートの国であるような気がしましたが、自然を破壊して人間中心の文明だけを考える方向に行かないようくれぐれも願ってやみません。

ラオス子供たちの笑顔はたまらないほどのものだった。それに困まれて、これほど笑った事があったらどうかというくらい僕も笑ってしまっていた。

古内忠輔

やべさんや会の方々から、ラオス

のことや会の活動などを聞きつつも、どこか現実感のないままラオスへ向かったように思う。やべさんのアシスタントとして参加したわけだけでも、現地での資材購入や、下準備など、セミナーに対する認識の薄弱さを痛感せずにいられず、それらや、ラオスの大地が持つ色彩のコントラスト、柔らかくも全てを覆いつくす大気らが重なりあい、ああラオスに居るのだなという実感となっていた。そして何よりも、やべさんのおもちゃを通じて子供達と触れ合えた事が僕にとってのラオスを決定づけた。ともにものをつくり、一緒に遊ぶ、そこに言葉の壁はなく、大人も子供も関係ない。なにかをするたびに子供達の笑顔がこぼれおち、つられてこっちもこぼれおち、やべさんのペットボトルロケットのおかげで、名前も知らない小さな友人達をラオスでたくさんつくりすることができた。

ラオスの方が言っていた。我々は物質的だけでなく、精神面においても発展してゆかなければならない、と。実際、僕が育ってきた世の中は物に満たされながら、一方では人との接し方、ふれ合い方、感情表現がうまくできないなど内面的な問題を数多く抱えている人が多いと思う。

サヤブリでともにした人々にバーシーのひもを結んでもらう中、おもわず涙してしまった。ラオスの持つ豊かな伝統と、そこで出会ったすべての人達に感謝の気持ちを込めて。

やべみつのり先生のアシスタントとして参加。忙しかったけれど、ゆつくりとラオスを満喫してきました。

近藤道子

セミナーに参加して...、少しス

ケジュールがきつく、お休みがもう少し欲しかった...。行きもバンコクで列車に乗るまで荷物を運ぶのが大変で、そういうことも何とかならないのでしょうか...とか、いろいろありましたけれど、参加した先生方の授業、紙芝居づくり、おもちゃづくり、水彩、人形、etc...。どれもすばらしく、私も勉強になり、学ばせていただきました。

今回はラオスという国も初めてだし、授業に携わるのも初めてで、不安と、自分が本当に行っているのか、でも行ってみたい、知りたい、と、何だかんだ迷いつつ、出発しました。

一番、印象に残っている学校が、ノンニエン小学校で、校庭に大木が一本あって、とても素敵な学校でした。その大木の前で初めて紙芝居をさせてもらって緊張したけれど、やべ先生の作品、「でてきた、なあーんだ?」を1枚1枚、「メーニャン(何)?」と聞きながら見せていく。そうすると子供達がそれぞれ思い浮かぶものを言いあって、当たると、「ワーッ」と歓声が上がり、授業とはまたちがう楽しさと、何というか、一体感が感じられて、また、たくさん元気パワーをもらいました。コブチャイ ライライ



『絵とき辞書』配付同行記

安井清子

会の支援で出版した『絵とき辞書』（ラオスの国語辞典）、物語の『カンパーキーフード』『クンルーナングア』『ラオス文字の歴史』を96年1月22日～31日にかけて、ヴィエンチャン各郡の教育委員会に届けました。

本を届ける——。それだけの仕事である。しかしパダベットさんは、「はじめは、ヴィエンチャン県の教育委員会で大きな贈呈式をやって、そこに、各学校から先生にきてもらって配れば、わざわざこちらから出向いて行く手間もはぶけていい、という意見も出てたのよ。でも、道が大変なところもあるし、交通費もかかるし..実際に各学校から先生たちが全員来るのは不可能に近いでしょう。で、配り残しを県教委に委託してしまったら、確実に各学校に届くのはいったいいつのことになるかわからないでしょ。だから、会の方からせめて各郡の教育委員会まで届けて、そこに各学校から先生に取りにもらうことにしたの。そうすれば、実際に先生たちから学校の情報を集められるし、学校の様子を見に行くこともできるでしょう」

実にその通りだと思う。

一口にヴィエンチャン県といっても、ファン郡、カシー郡、サナカーム郡などは道路の状況、そして、これまでゲリラが出没しやすいところとしてあまり援助活動が入っていなかったところだけに、地方の県以上に近くて遠い場所だった。それだけに、この度、実際に行くことができ、本当によかったと思っている。

【ムアンファン高校】

生徒：305人／先生：24人
図書室はあるが本はない。

贈呈式で酒を飲まれた後、昼食

の前のあわただしい訪問であった。昼休みで生徒の姿も見えなかった。本がないし、言うまでもなく必要なのは、どこの高校とも同じことだ。

家が遠くで通って来られない生徒たちは、やはり、学校近くの掘っ立て小屋に住んでいた。覗くと、4～5人の若者たちが、暗い竹小屋の中にいた。26人がこの寄宿“小屋に住んでいる。もちろん、米を自宅からかついできての自炊だ。一人の高校生が暗い小屋の中から出てきた。

「何年生？」「3年」

「家は遠いの？」「ああ、遠いよ」

私を見おろすようにヌツと立った高校生の彼が、あまりに堂々として存在感に満ちていたので私は感動してしまった。これは、高校生にして、すでに自分の力で生きていることから出てくる存在感なのだろうか？

高3の内、20%が進学、80%は家の手伝い。水田や畑仕事に携わることになる。

ラオスの実情ではあるのだが、各郡の一つしかない高校に進学してきているということは、ある意味では、他の小中で終わってしまった子どもたちよりは恵まれているのかもしれない。また、本人に「勉強したい」という意欲もあるのだろう。しかし、せっかく苦労して米をかついで、掘っ立て小屋を作ってまで勉強しにきているのに、高校には、本の一冊もない実情。せっかくここまで勉強しにきているのだから、せめて、ラオ

スの数少ない本にしても、読む機会があれば、どれだけいいだろうか、と思う。また、せっかく高校まで来ても、やはりその後80%は、家の農作業をするしか他に職はない。都会に出て、都会の労働人口に含まれることがいいとは思わないが、実情では、彼等は進学ができずに仕方なく、家に残って手伝いをしているという負のイメージでとらえられてしまう。本当は、もっと彼等の存在を積極的にとらえて、この農村にいる若い力を生かせることのできる方向に進んでいけば、農村の活性化にもつながっていくのかもしれないなあと思う。そんなプロジェクトができればいいのだが・・・

【バンドーン中学】

生徒数：396人 教室数：6

1教室に60人以上の生徒がつめこまれている。教室が足りない。昨年の生徒数は295人だったので、100人も多くなった。今までも足りなかったのに、ますます足りなくなってきたという。机椅子も足りないので、これは生徒に家から持ってきてもらう。

「自分で持ってこなかったら、勉強できないってことよ。だって足りないのだから。仕方ないわよ」

と、いつも笑顔の丸顔の校長先生(女性)は明るく言う。

図書室用の教室はないが、もちろん図書はほしい。ここムアンファンの特徴として、先生たちがまず関心



生徒手作りの寄宿「小屋」

ある本の1番目に、「保健衛生の本、基礎医療の本」があがることである。病院が遠いので、応急手当、簡単な病気に対する知識や処方などが書いてある本が必要なのだという。他には、女生徒に対して、裁縫、あみもの本が欲しいとの要請。女の校長先生ならはだ。科学の本、技術工作の本なども…。

■1月23日 ムアン・フアン訪問

以前、飛行機から見たムアンフアンは、まるで仙人が住んでいるような山々が連なっているところだった。

道は、まだ舗装はしていないが、現在工事中とのことで、かなりならされているところもあるし、まだでこぼこだらけのところもある。いずれにしても、ピックアップトラックの荷台に座っていたダヴォン先生の髪の毛は、すっかり赤毛と化してしまった。もうもうとすごい土ぼこりがたつ。道に面した家々や、木々は、赤茶色にぶあつく土ぼこりがかぶっている。しばらくは両側に村が続いていたが、じきにまだ人手の入っていない鬱蒼とした森林が道の両側に現れた。急に奥深くになってきたような気がする。ワンピエンに行く道なども昔はこうだったのだろうか？今はすっかり木が切られて開けてしまっているが…ここも遠からず木が切られてしまうのだろうか、残っ

ていてほしいものだ、と思っているそばから、でかい木を満載したトラックがすれ違う。

辞書の贈呈式は、中心のムアンフアンではなく、その手前にあるナーカン小学校で行われた。学校についた途端、私達はビビってしまった。これは本の贈呈式というよりも、まるで村祭りか結婚式の会場のようである。校庭の真ん中には、大きなパラシュートテントが張られ、すでに、バナナの葉と花で作られた飾り物もそなえられ、パーシーの準備がすでに整っている。学校の入口には、[Welcome Muang Puang (Fuang かなと思うが?)] というたれまくとバナナの葉で作ったゲートが作られ、そのゲートから学校の建物までの間の、校庭に、何十人という生徒たちが、両側にずっと列を作って拍手をして待っているのである。

すごい歓迎。まるで皇太子妃か、はたまた共産党の幹部にでもならないと、こんな歓迎は受けられないかもしれないな…と思いつつも、かわいそうに炎天下の中をいつからこうして待っていたのだろうか？

古い隙間だらけの会場に入ると、各学校から集まった先生たちが、ピシッとユニフォームを着て集まっていた。全員ベージュ色の先生のユニフォームを着た校長先生たちが80人も集まっているとなんだか迫力がある。女の先生も4~5人見えた。

来賓も、副県知事、党関係のおえら方、女性同盟幹部、郡教育委員長と、壮々たるメンバーが揃っているのである。

「副知事さんが参加するなんて、こ

こだけだぞ！挨拶の時には、写真を撮れよ」と、私たちに同行したヴィエンチャン県教育委員会のダヴォン先生が私に耳うちをする。一番最後に入ってきた副知事さんは、一人だけ気軽にジャージの上着をはおった、とても気さくそうな人だったのでほっとした。この副知事のヴィエン氏は、なんだかとぼけた味をかもしだしている人で、あいさつも形式張ったものではなくよかったが、後で聞くとところによると、ヴィエンチャン新聞(月刊の新聞)のお笑い話のコーナーに、書いている“お笑い話作家でもあるという。いかにもそんな感じの人である。

「ムアンフアンにわざわざ本を届けに来てくれるというので、全部の学校から先生を集めたよ。ここムアンフアンは、今まで外国の援助は元より、国立図書館などの中央官庁の人だってみんないやがって来ようとしなかったのに、こうして今回、本を送るだけでなく、日本人が直接来てくれたことは、本当に嬉しいんだよ。

だから、こうして全員を集めたんだよ。先生たちもみんなよろこんでいるんだ。ぜひ、実情を見てほしい」と、郡教委のビエンサイ先生が言う。全員集まっているなんてすごい！おまけに配布の対象になっていない幼稚園の先生も来ていたので、ギリギリの数で持っていった辞書は足りなくなった。(ムアンフアンに幼稚園は3園。絵本やおもちゃがないとのこと。今回せつかくやってきたのだからと1冊ずつ渡す。後で絵本を届けることになった)

本の贈呈式の後には、校庭に張られた大きなテントの下で、パーシー。

すでに長老たちが集まっている。こ
こムアンフアンは、古くからの伝統
が守られているところなのだろう。

地元で守られている歓迎のやり方
をきちんと受け継いでいるという印
象を受けた。パーシーの時に唱えて
いる文句がところどころ面白いらし
く、人々がワーっと笑う。後ろに座
った女の先生たちが、勢いよく米を
まく。髪の毛が米だらけになる。

ダヴォン先生は「いやぁ、ムアン
フアンに行くとき酒を飲まされるから
困ったなぁ」と言っていたわりには、
自分からすすんでガブガブ飲んでい
る。実のところは相当な酒好きだろ
う...ムアンフアンの酒は60~70度
あるという。「ムアンフアンの酒は
すぐ酔うけど、すぐさめるからボペ
ンニャン（大丈夫）だよ」といって、
私もたくさん飲まされた。

私も困ったなぁといいつつ、断ら
ないので...確かに、酔っぱらって
ヨタヨタになるようなことはなかっ
たけれど、昼間の酒はきつい。この
酔っぱらった勢いで、ワイワイ高校
を見にいき、その後、また郡教委の
ピエンサイ、中学校長のソムサヌッ
ク先生夫妻の家でお昼をごちそうに
なった（この家に泊めてもらう）。

昼ごはんは、ピエンサイ先生の妹
さんが、小学校の先生の仕事を休ん
で準備してくれていた。30人近くの
先生たちがなだれこんで食べる。家
の庭には、まだ抜かれたばかりであ
ろう、おびたしい羽根が散らばっ
ていた。「いったい何羽料理された
の?」「ニワトリとあひるが3~4
羽づつかな?」そのおびたしい羽
根の回りを、今晚の運命も知らずに、
ガァガァとあひるが呑気の歩き回っ
ていた。しかし、あひるには有り難

いことに、ソムサヌックかあちゃん
は言った。

「今晚は、ト・オンを料理して食べ
させるわ。食べたことある?」

「え?もしかして、あの丸々とした
野ねずみみたいな可愛いやつ?」

「そうそう、おいしいのよ」

「うん、でも、あんまり...とって
もかわいいよね。あんまり食べたく
な...」

丸々まるとした野ねずみのような、
ト・オンは、竹を食べる野生動物で、
竹を食べるためのするどい歯を持つ
が、見かけは可愛らしい小動物だ。
「あら、もう二匹買ってあるのよ。
ラープにするとおいしいからね。」

ソムサヌックかあちゃんは、満面
ひまわりみみたいな笑顔になった。回
りの先生たちが舌なめずりしたよう
だった。

夕方になると、男たちが、料理を
はじめた。かあちゃんの方は、

「タムマックフン(パパイヤサラダ)
食べたいから、アレとコレと買って
きてよ」と、男たちをアゴで使いな
がら、「今日は、日本人が作ったタ
ムマックフンを食べよう」と、私に
作り方を教えながら作らせた。

「今日は、私がお客さんのもてなし
役よ。男たちが料理役なの」と、か
あちゃんは、「さぁ、タムマックフ
ンをたべましょ」と、私たちは、せ
っせとアヒルをしめたり(結局ト・
オンはいやだというわがままな私達
のために、運の悪いあひるがまた料
理されることになったのだ)、ごは
んを炊いたりしている男たちの横で、
タムマックフンをつまんだ。

男たちは、文句も言わずにみなせ
わしなく働いている。ごはんは、普
通はもち米を食べるのに、日本人に

気をつかって、うるち米を炊いてく
れたのだが、芯が残ってしまって、
どうしようとうろたえている。

「うるち米、炊いたことないの?」

「ないんだよ。今日のはじめてだ」

ここでは、うるち米は粉にしてコ
ーブンやカオピアックなどの麺を作
るのに使うそうである。わざわざ気
を遣ってくれたけれど、本当はおい
しく蒸したもち米の方がよかったの
になぁ...と思う。

電気はまだなく、ランプの明かり
が灯された。外は、まさに降るよう
な星空。

ト・オンとあひるのごちそうがで
きる頃、警官のおにいさんが、一人
席に加わった。私達の安全のためだ
そうで、今晚はこの家で眠って、私
達をガードして下さるそうである。

酔っぱらいの酒好きの先生たちの
中で、おとなしそうな警官のお兄さ
んはしらふで職務をまっとうできる
だろうか...とかえって心配してい
たが、夜寝る前に、外庭にあるトイ
レに行き、落ちてくるような星空を
みあげてボーっとしているくと、警
察のおにいさんも、なにげに近くに
立っていた。

「見張られているんだか、警護して
くれているんだか...ごくろうさま。
でも、何もおりゃしないよ」

ムアンフアンの夜は、ただただ静
かにふけていった。



原点にかえるため、CCC引っ越し。

ヴィエンチャンの子ども文化センター(以下CCC)が、移転します。引っ越しはこれで2度目。最初は私立学校の2階を借りてスタートしたのですが、家主から、使うから出ていってと言われ、緊急避難的に現在の一軒家に移ったのです。1回目は追い出されたのですが、今回は、ちょっと違う理由です。

ひとつには、最近のCCCの変化があります。つまり、お金もちの子どものおけいごとの場としては活発だけど、近所の鼻たれ小僧が近寄りたくなり、図書室もあまりさかんでなくなっていることから、立て直しを図りたいということ。

もうひとつは、CCCから歩いて10分ほどの所に、こどもの家という日本のNGO曹洞宗国際ボランティア会が自治労の支援のもと、大規模な子どものための情操教育施設が開設したことです。この施設の活動内容はCCCとほぼ重なり、管轄している機関も、さらにそこで働くスタッフも同じです。

率直に言って、「よりによって、

何でこんな近くに」というのが、最初の私たちの反応でした。ヴィエンチャンのような交通手段が十分ではない土地において、子どもたちの生活圏はかなり限定されます。類似施設が近接して設けられるということは、利用できる子どもが限られてしまうということであり、教育効果を広げる方向とはなりません。とりわけ私たちのように、予算の限られた小さなNGOにとっては、予算と活動内容の対比が効率的かどうかは重要な関心事です。

そこで会では議論を重ね、もっと下町の子どもたちの多い地域に移転させることを決断しました。少しでも多くのラオスの子どもたちが、読書や自己表現の訓練に接する機会を設けていくという、われわれの原点にCCCを戻そうという考えです。そして、この夏、カウンターパートとの会議で移転は決定しました。

とはいえ、ヴィエンチャンでも近年は、良い環境、条件の土地や建物を捜すことはなかなか困難です。今、捜しているのは子どもが土に接する

ことのできる庭付きの物件。意外にもラオスでも、土にまみれて遊ぶことが少ないからです。

* *

それにしても、開設時の財源不足、活動が安定してきた開設半年後に持ち上がった施設移転問題、館長(ダラーさん)の交代、そして今回の再移転問題と、CCCは、次から次へ問題が起きました。プロジェクト運営には問題が付きものとはいえ、CCCは他の会のプロジェクトと異なり、政府機関(情報文化省)の一機関の活動を支援する形で私たちが関わっていることの難しさがあります。CCCのスタッフは政府職員であり、運営も政府側で行うということで、私たちが直接関与できる部分はかなり限られていること。さらに、会の現地スタッフが日頃から接触をしているとはいえ、見える部分も限られているということがあります。運営上の障害、問題点などが、こちらにストレートに入ってこず、問題が顕在化して初めて、対応策が練られるということになってしまいます。

年内を目標に新しい建物を捜し、来年からは、現在よりもう少し変化がある活動を期待しています。

出版・学校図書室プロジェクトの進行状況

出版

- 絵とき辞書 第2刷 2500部 完成
- 古典出版『シートマンロー』 初版5,000部 完成
- 『チャオペッサラート』 初版2,000部 完成
- 『マホーソット博士』 再版2,000部 完成
- 文字・数字絵本：文字絵本 2分冊×5,000部
- 数字絵本 + 5,000部
- 計15,000部 10月完成予定
- 創作絵本 『賢いのはどっち?』 3,000部 10月完成予定
- 『子カエルやーい』 5,000部 編集中

[資金源 ドナー]

- 山田国際財団設立委員会
- 郵政省国際ボランティア貯金平成7年
- 東九州女子短期大学
- 郵政省国際ボランティア貯金平成7年
- 郵政省国際ボランティア貯金平成7年
- 郵政省国際ボランティア貯金平成7年+自己資金

学校図書室

- 昨年開設した(Hak Arn ヴィエンチャン特別市内5か所) 図書室の継続支援
- 本年開設する図書室
- 全面改修する学校
 - ・ヴィエンチャン県トラコム郡 ケオクウ小学校
 - ・ルアンパバーン県パックウー郡 パックウー高校
- 空教室を利用する学校
 - ・ルアンパバーン県 ルアンパバーン高校/教員養成学校/ルアンパバーン小学校
 - ・サヤプリ県 ゲンタオ高校/バクライ高校/ムアンピアン高校

[ドナー]: 外務省

会では、送付絵本リスト(103冊)をつくり、その本に限定してラオスに送っています。リストを会までご請求ください。
本の送り先: A.S.P.B. P.O.BOX 1518 VIENTIANE, LAO P.D.R.